新春文芸

洪水対策論の系譜

―治に居て乱を忘れず―

土浦市立博物館長
筑波大学名誉教授
岩﨑宏之

明けましておめでとうございます。穏やかな新春をお迎えになられていることとお慶び申し上げます。

私も昨年は古稀を迎えました。私は土浦に生まれ育ち、長い間住み暮しておりますが、土浦の町の住みよさを実感しております。土浦はほんとうに災害の少ない、平穏無事な土地柄といえるのではないでしょうか。近くに活断層があるそうですが、大きな地震につながるようなものではなさそうです。海の近くではないので津波の恐れもありません。気候は穏やかで、冬に大雪が降るのもまれなことです。太平洋戦争の時代、小学校(当時は国民学校)の校庭までが掘り起こされて、一面のサツマイモ畑になったことがありましたが、その時代でも飢えるほど食べ物に困ったことはありませんでした。時代の変化に先頭を切らなくても、人びとが平和に暮らすことができれば、「無事是れ名馬」の諺(ことわざ)もありますが、まずは結構とする心境で過ごしているこの頃です。

しかし、ご承知のように、江戸時代から昭和初年にかけての土浦は、たびたび水害に見舞われました。洪水が起こる頻度は、ほかの土地と比べて圧倒的に高かったのでした。土浦に洪水をもたらした原因として桜川の氾濫・決壊と霞ヶ浦の逆水があることはよく知られております。逆水とは、利根川の洪水が霞ヶ浦に流れ込み、その水が逆流して水害をもたらすことです。逆水になると、土浦の中心市街地が低地なので容易に水が引かず、浸水が長期にわたり、大きな被害となります。昭和13年(1938)の洪水はこれらの原因が複合して大水害となったのですが、江戸時代以来の多くの洪水の歴史をみると、その出水の様相はすさまじいものでした。

幕末の土浦藩に長嶋尉信(やすのぶ)という人物がおりました。尉信は天明元年(1781)筑波郡小田村(つくば市小田)の小泉家に生まれ、同じ小田村の名主長嶋家の養子となり、名主職を継ぎました。名主を辞したあと学問に志し、農政学者として一家をなします。治左衛門、二左衛(にさえ)、三太三(みたみ)などと称し、三村山人(さんじん)、郁子園(むべぞの)などと号しました。その後、水戸藩に招かれて天保期の検地などにかかわりますが、土浦藩では自藩の人材が他藩に仕えて名を成しているのは藩の面目に拘わるとして、天保14年(1843)土浦に呼び戻され、御代官列、六両三人扶持で地方掛(じかたがかり)として召し抱えられることになりました。住居を外西町に与えられて、土浦藩では御城御屋形向御修復御用掛(おしろおやかたむきごしゅうふくごようがかり)や東崎分や中城分の地改御用掛(ちあらためごようがかり)などをつとめ、土浦城下の検地(安政の地詰)に従事しました。尉信は色川三中(みなか)、大久保要(かなめ)、船橋随庵、佐久良東雄(あずまお)などと親交があり、たくさんの書籍稿本類を残しております。尉信が残した資料類はご子孫から茨城県立歴史館に一括寄贈されて、閲覧が可能になりましたが、そのなかに

小野寺謙画「長嶋尉信肖像」(博物館蔵)

土浦の洪水の沿革を考察した「土浦洪水記」と題する尉信の著作があります。

尉信は、大きな被害をもたらした天明6年の洪水は、桜川の坂田地先の堤防が決壊してその水がまっすぐに立田曲輪（土浦二高あたり）に押しよせ、出水があまりにも急だったので家々では家財などを持ち出す余裕もなく、家の大切な古文書などもこの洪水で失われたものが多いと述べております。そして後の弘化3年（1846）の洪水とを比較して、後者が「ただ浦入の逆水のみが静かに押し上った」典型的な霞ヶ浦の逆水による洪水で、天明の時のような急な出水ではなかったとして詳しく論じております。

この弘化3年の洪水の時、尉信は娘とともに田宿町の色川家に身を寄せて難を避けておりました。この時、色川三中は川口の醤油蔵の方に移っており、田宿町の薬種の店は弟の金次郎（美年）が経営しておりました。色川家の日記「家事志」も金次郎が書いており、この洪水の時のことも「家事記」に詳しく書かれております。大水になる気配で尉信が色川家へ避難したのが6月26日ですが、この日から出水がはじまり、7月22日になって漸く水が引きはじめ、水の騒ぎが収まるのは8月の下旬になってからでした。この間は、浸水の増減に一喜一憂して過す毎日でした。

土浦の水害の特徴の一つは浸水の期間がきわめて長いことにあります。ことに霞ヶ浦の逆水の場合は長くなり、排水されるのをひたすら待つだけの毎日でした。尉信や美年たちは、色川家の2階でさまざまな物語などをしておりますが、土浦の水害への対処の方策などについても話が及んだことでありましょう。

三中には御蔭というもう一人の弟がおりました。幼名を亥之吉といい、金次郎より2歳年下でした。25歳の時に父を失った三中は、弟たちにとっては父親代わりのような立場にありました。次弟の金次郎には土浦の商売を継がせますが、亥之吉は幼い時に土浦藩士塚本吉右衛門の家に養子に出されました。しかし養父の死後、文政13年養母の乱心によって実家に戻り、忠三郎と改名、その後、江戸に出て天保4年旗本牧野長門守に仕えて住み込みます。牧野長門守の長崎奉行就任にともなって長崎に随行もしていたようで、橘守部に入門して国学を学びました。後年は経済学者として「貨幣要義」などの書物も著わしますが、この洪水の時には土浦に戻っておりました。御蔭は慶応元年（1865）に「防逆水私議」（内題は「逆水防議」）を著わしますが、このなかで簀子橋や桜橋の下に関枠を設け、圦樋に扉を付けて、それを開閉することによって逆水を防ぐ方策を提案いたします。

川口川に閘門を設置したり、湖水側に鉄道線路（現在の常磐線、当時は日本鉄道会社海岸線）を敷設することによって霞ヶ浦の逆水を防ごうとした色川三郎兵衛（英俊）の功績を、私たちは子どもの時から聞かされました。銅像になって霞ヶ浦湖岸に立っているのは千葉県山武郡上堺村（現在の横芝光町）の海保家から養子に入って色川家を継いだ英俊ですが、この英俊の構想につながる色川家の家論ともいうべき洪水対策論が形成されるのを、窺い見ることが出来るのではないでしょうか。

土浦の町はその後もたびたび水害が襲いました。今でも昭和13年（1938）、昭和16年（1941）の水害は人びとの記憶に残っております。その後は桜川の治水工事が成果を上げたことはたしかですが、大きな被害を引き起こす猛烈な台風の直撃がなかったことも幸いしているのでしょう。

現在の土浦は、城跡の堀を埋め、市内を流れる川口川や築地川などをつぎつぎに埋め立てて道路にしてきましたが、果たして水害が起こる危険性は無くなったのでしょうか。近年、台風の被害や局地的集中豪雨など、思いもよらない災害が各地に現われております。自然の猛威は我々の人知を越えたものです。100年に一度、200年に一度の豪雨が今年起こるかも知れません。近ごろ国や地方自治体でハザードマップ（災害予測地図）作りがすすめられているのも、こうした状況を反映しております。もちろんハザードマップを作っても、洪水が起きないわけではありません。しかし、あらかじめ心構えをして、起こる事態に備えることによって、被害を少なくすることは出来ます。「歴史資料を読む」ことによって、過去の氾濫の実績を知ることが出来るのです。「治に居て乱を忘れず」です。

今年、土浦市立博物館では大掛かりな展示改装工事を進めております。改装の一つのテーマが「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を知ることです。

私は「豊かな水の街土浦」に育ったものとして、先人たちの知恵や労苦に思いをいたしたいと考えております。

色川三郎兵衛の像